

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	「甘え」の倫理的意義：和辻による「生の哲学」からの提案 (2)
Author(s)	黄, 萍
Citation	HABITUS , 24 : 55 - 74
Issue Date	2020-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/48942">10.15027/48942</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048942">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048942</a>
Right	
Relation	



# 「甘え」の倫理的意義

——和辻による「生の哲学」からの提案（2）——

黄 萍

（燕山大学講師/広島大学大学院文学研究科博士課程後期）

## はじめに

本論文で対象とする『ニーチェ研究』<sup>1)</sup>は和辻哲郎のニーチェ論である。これは和辻の哲学者としての出発点を成す書物であり、また日本における初めてのまとまったニーチェの研究書として知られている。和辻の『ニーチェ研究』は、「自序」に示されるように、ニーチェの『権力意志』の目次と重ねた章構成がとられる。ニーチェは生前その哲学を体系化しようとはしなかったが、和辻は「少なくともそれを整理しようとし」<sup>2)</sup>、「またそれは整理せられべきものである」<sup>3)</sup>と考えている。ただし、このような他者を介した整理のため、ニーチェの輝いた光彩陸離な言説は少なからずその味を損じられるおそれがあるが、ニーチェの根本思想を理解しようとする以上、それはやむをえないことである<sup>4)</sup>と和辻は言い添えている。つまり、もしニーチェの言説を「テキスト」とすれば、和辻のニーチェ解釈はその「テキスト」に対する和辻自己の理解であるといえる。このように考えれば、和辻のニーチェ研究はニーチェの言説であるとともに和辻自身の考えも織り込まれているわけである。結局、和辻のニーチェ研究は和辻自身とニーチェの哲学が一つに融合していると考えられることもできる。これについては、『ニーチェ研究』の「自序」における和辻の以下の叙述をもって検証できる。「ありの儘のニーチェに觸れようとする人は、ニーチェに直接打突かつて行くより外に道はない。この研究に現はれた

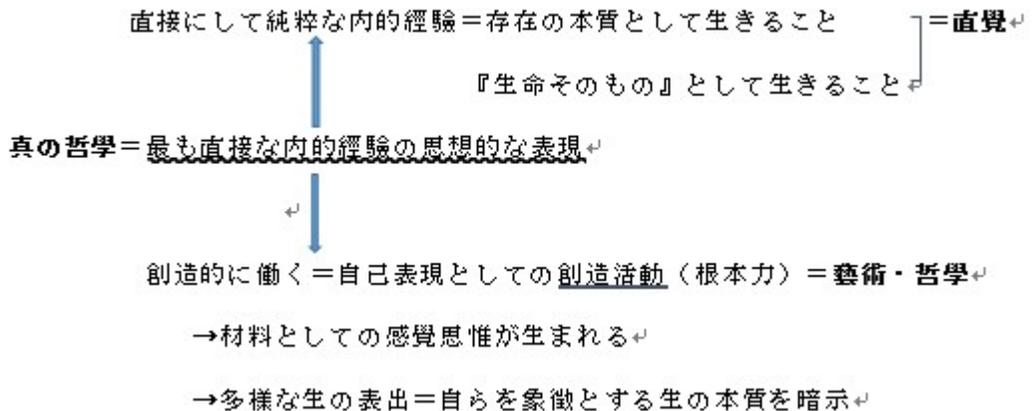
ニーチェは厳密に自分のニーチェである。自分はニーチェによりニーチェを通じて自己を表現しようとした<sup>5)</sup>という記述はすべて、ニーチェ思想を介した和辻思想の表明を意味する。すなわち、『ニーチェ研究』は単なるニーチェが自己を表現している所に関する整理ではなく、同時に和辻が自己を表現しようとしているものといえる。要するに、「真実のニーチェ」を捉えようとしてニーチェの哲学を和辻流に解釈した書物が『ニーチェ研究』ということができる。言い換えれば、『ニーチェ研究』での和辻はニーチェ哲学の含まれている哲学観をニーチェと共有しながら、それを前提としてニーチェ哲学を解釈する立場に立っている。したがって、この『ニーチェ研究』によって日本の倫理学者和辻の目を通したニーチェ哲学が読み解かれるだろうと思われる。本論文の第一節においてまず和辻の説く「生の哲学」に関するニーチェ哲学の概観を把握していく。

## 第一節 「生の哲学」に関するニーチェ哲学と和辻哲学の概観

ニーチェと和辻における「生の哲学」を把握するには、その関係をうかがい知ることのできる『ニーチェ研究』の本論第一の冒頭の記述が有効である。

真の哲学<sup>6)</sup>は単に概念の堆積や整齊ではなく、最も直接的な内的経験の思想的な表現なのである。直接にして純粋な内的経験とは、存在の本質として生きることを意味する。…(中略)…直接的な内的経験をもし直覚と呼ぶならば、この直覚は「生命そのもの」として生きることなのである。もとより「宇宙生命」は不断の創造であるから、直接的な内的経験もまた創造的に活らく。自己表現はこの創造活動である。藝術や哲学は皆こゝから生れる。ところでその材料となつてゐる感覚思惟などもまた同じく根本力の創造活動から生れたものである故に、複雑多様に生を彩つてゐるが、それ自らは象徴として生の本質を暗示してゐるに過ぎない。<sup>7)</sup>

上のことを図式に纏めていくと以下のようなものである。



和辻はまず「真の哲学」を「最も直接的な内的経験の思想的な表現」と規定している。その上で、和辻は、この「直接にして純粋な内的経験」とは、「存在の本質として生きること」「『生命そのもの』として生きること」とし、そのことを「直覚」の営みと重ね見ている。一般に「直覚」とは、悟性的な思惟を超えて事象の本質を把握する高次の認識能力と考えられる（ドイツ観念論など）。だが、ここで和辻が「直覚」と言う場合は、単なる真理認識や価値判断を担う能力というよりも、自己と普遍（存在）とが即応する認識体験のことが意味される（ベルクソンなど）<sup>8)</sup>。

しかも、この直覚としての「直の内的経験」は、自己の固執した見方を常に更新し、「創造的に働く」ものと考えられた。そうした営みの最たるものが、自己表現としての創造活動である「芸術」や「哲学」であるという。この普遍世界と現象世界をつなぐ「多様な生の表出」の営みこそが、自らを象徴とする生の本質を暗示しているとされる。

すなわち、ここで語られる和辻の直覚は、ニーチェ同様、固定した物の見方や現象の表層的な事実記述を超え、「存在や生の本質」にまで及ぶ認識体験をさすもの

と理解できる。以下、ひきつづき和辻のニーチェ理解を通して、和辻の考える「生の哲学」の内実をみていこう。

前述したように、和辻は「真の哲学」へのアプローチの手段を「直接的な内的経験」としての「直覚」に見、それは、「生命そのものとして生きること」であるとした。その意味で、「真の哲学」は「単に概念の堆積や整齊」ではない、と強く主張する<sup>9)</sup>。概念というものはただ符号であり、その指そうとするものは常に変化し流動している。つまり、「実在」は刻々として流動し融合しているから、符号である概念でもって、「直覚」を表現することはできないという。そして、その「直覚」を概念化しようとするような体系哲学は「実在」に逆らったもので真の哲学ではないと裁断するのである。

和辻にとって「哲学」は、その「實在に即したのものとしてのみ真の意義をもつ」<sup>10)</sup>と考えられた。この意味で言えば、ニーチェの哲学は「人生を束縛し固定せしむるのではなく、生の流転を擁護しながら益々人生を強烈ならしめる」<sup>11)</sup>ものとして見られ、真の哲学であると和辻には思われる。

このように和辻のニーチェ理解によれば、ニーチェの哲学は概念の論理的整齊というよりむしろ直接的な内的経験の表出であるとされる。では、論理の欠陥について和辻はどのように見ていたのであろうか。

和辻によれば、「論理は『同一にする』『同一に見る』といふ根本的傾向、即ち力の同化合物の活動が、多様な現實に伴ひ種々に展開したもの」<sup>12)</sup>であり、「論理は眞實を知ろうとする意志より出たものではなく、この『同一にしよう』とする傾向から出た」<sup>13)</sup>のであるとされる。つまり、かれは、現実には「差違」や「雑多」や「混沌」があるにもかかわらず、論理主義が同一律を根本原理に置き、同一化や一般化の上に世界を築き上げたことに批判のまなざしを向けるのである<sup>14)</sup>。

このような見方に立ち、和辻は、論理主義が、われわれの概念や思惟を抽象化・客観化しようとするのみであって、実在そのものを「そのまま」を知ろうとするの

ではないと批判し、実在の解釈に向かう「生の哲学」の意義を主張するのである。その和辻が描く「生の哲学」モデルがニーチェの思想であり、ニーチェにとっては、論理や理性は流転する生の単なる道具であり一時的な象徴とされた。そこでは、「概念より概念を引き出し、結論の上に結論を、判断の上に判断を重ねる」<sup>15)</sup>方法は認められない。和辻やニーチェの場合、論理主義は、「静止不変にして永久に同一なる實在」にとって「論理の假構」を示すにとどまり、「形式に表はすことの出来ない流動の世界を單化し解釋して、生に有用なだけの凝固した形式の世界に造り更へたものである」<sup>16)</sup>と非難される。

このような批判に立ち、和辻・ニーチェ論では、論理主義的な認識の限界を超えて、「生」がもつ統一力の有効性を主張する。そのことを和辻は次のように解説する。

直接的な内的経験は、「認識能力によって掴まるゝものではなく、反って認識能力の根本原理となつてゐる強い統一力である」<sup>17)</sup>。われわれが「知識の拘束を脱して純粹にこの統一力として生きる時、生は即ち感動であり、認識の形式を絶した認識である」<sup>18)</sup>と。

このように和辻論にみるニーチェは、科学的知識の束縛を斥け、直接にして純粹な生を立脚地として認識能力を見ている。ニーチェにとって「人の知能」<sup>19)</sup>は、「人の本質たる生が不斷の創造をなすに當つての一つの手段である。それは生の統一力を強大ならしめるために、多様にして豊富な生の活動を整理し、特殊な解釋の世界を造り上げる」<sup>20)</sup>とされる。しかし、その生と認識について、そこでは、「人の認識能力は決して生の深味に突入し得るものでなく、逆に生の深味から萌え出たものなのである」<sup>21)</sup>と解説が加えられる。つまり、和辻の言うニーチェ論にとっては、生の本質は「人の根本動力本能活動として吾人の内にあり、意識以上の感動として意識を動かしてゐる」<sup>22)</sup>と理解される。この本能は「特殊な解釋に汚されない純粹な生の活動であつて、吾人の内に具體的な統一力として活らき、また知力よりは幾

倍か鋭利な直覺として現はれる」<sup>23)</sup>という。ここにおいて、「直覺」は、単なる認識能力をさすのではなく、「生の純粹な充実」「生命の強大」を意味し、「人の本質である力」とは、「主客の對立を絶したる『感動』そのもの」を指し示すである<sup>24)</sup>。

以上の観点に従うならば、逆に、知力の堆積によって生を拘束される人や、知力が生のためにあると事実を転覆した形で見ると人は、その生を貧弱なものとするとともにその直覺もまたなんらの力を持っていないことになる。その反対に、あらゆる知識や言語や思想などの支配力を脱して「自己」としてあり、その自己が強烈なる生の燃焼である場合、直覺は最も旺盛となる。そして、和辻は、「ニーチェ自らもかくの如き直覺によって生の本質を深く強く體現したのであった」<sup>25)</sup>と語る。では、和辻・ニーチェ論にとって自己と世界を内奥から突き動かす「力」とは一体どのように描かれるのだろうか。

和辻は、ニーチェが自ら生き直接に経験した世界は「流動する『力』」である、と見ている<sup>26)</sup>。それは、「單一でもなければ全體でもなく唯強烈な『統一力』として活らいてゐる」という<sup>27)</sup>。ニーチェは最初にこの「力」について、「欲動」と呼び、その後「力感」「力感の欲求」「権力意識」、さらに「権力の愛」「権力への努力」などと称したが、『ツァラトオストラはこう言った』<sup>28)</sup>に至って「権力意志」と表現を確定した。この「力」は物理学に言う力もしくはエネルギーでも力の作用でもなく、「内的意志」<sup>29)</sup>そのものを指した。そして、ニーチェはこの「内的意志」を「権力意志」と呼び、彼の内的経験を表現するのに用いたとされる。

その「権力意志」とはニーチェによれば、「生々発動して絶ゆることなき活動」であり、「権力を表示せんとする不斷の欲求」とされる<sup>30)</sup>。ニーチェがいろいろな言葉を考慮した上で最後に「意志」という語を確定したのは、和辻によれば、「内より沸き出づる」<sup>31)</sup>というニュアンスを表すためであった。「精神」という語を用いていないのは、そこに理性もしくは靈魂というような色彩が伴っているからである。また、「権力」という語は、それによって「力」に戦闘と征服との性質のある

ことを表すために、用いられたという。要するに、ニーチェの言う「権力意志」は生きた力、生命の力、自らはたらく力であるとともに、また成長し征服し創造する力であるといえる。

このように、ニーチェは論理や理性を斥け、直接なる内的経験、即ち直覚を力説し、さらに権力意志でもってそれを表現しようとしたのである。要するに、ニーチェの哲学は最も直接的な内的経験の思想的表現であるといえる。それは純粋な生の自己表現であり、権力意志の創造活動である。その生への意志は自ら働きつつある力であり、生命そのものとなる。ニーチェの言う「自己」は即ちこの権力意志そのものと重なりをもつ。「権力意志は現前の生としてその刻々たる創造を續けてゐる」<sup>32)</sup>。しかし、逆に、創造の道具として造られた論理的悟性的な認識に従い、「圖式的凝固的な傾向の過多なる堆積」が進めば、「生の創造的活動」が阻止されることになる<sup>33)</sup>。言語や思想や道德などは「生に必須なものであるが、一度生を規定しようとする傾向が生じた場合は常に害悪である。現代生活はこの害悪を最も深く受けてゐる」<sup>34)</sup>と和辻は見ている。「人は本来の生を離れて虚偽の生に没入してゐるのである」<sup>35)</sup>。ニーチェは「すべて最も完全なるもの最も自由なるものは現前の生を通じて活らいてゐるのだ。たゞ人がこの切實な生に遠ざかつてゐるのだ」と指摘し、「本来の生に歸れ、さうして創造に努めろ」<sup>36)</sup>と唱える。

以上、ここまで和辻による『ニイチェ研究』に従って解説してきたが、再度確認・注意しておきたいことがある。それは、本書のニーチェの文章に引用符がないために、和辻自身の地の文章とニーチェの文章とが区別できないことである。それは、多分、和辻自身とニーチェが基本的な哲学観を共有しており、和辻がニーチェにできる限り接近しつつその思想を追体験し、ニーチェの思想をなぞるかのようにニーチェに成り代わって叙述をしていることに起因するものと思われる。このことは、ニーチェ論への追思考と解釈の作業について、和辻自身が、「自分はニイチェによりニイチェを通じて自己を表現しようとした」<sup>37)</sup>と語っていることから確認でき

る。この追体験としての解釈作業こそが、和辻にとって「真の哲学」の営みであり、自己という生の深みから発する表現であったと思われる。したがって、ニーチェと共通の地盤に立ってニーチェ解釈を自己表現として遂行するという意図をもって書かれた和辻の『ニーチェ研究』は、オリジナルはニーチェの生の哲学であるにもかかわらず、本書の表現は限りなく和辻自身の生の哲学でもあるといえる。

本節において、和辻・ニーチェ論を「生の哲学」との連関の内に見てきた。次節においては、その「生の哲学」にかかわる「自己」と「生」について、ニーチェの「権力意志」という見方のもとに詳細に見ていく。

## 第二節 「自己」と「生」

「自己」と「生」を考えるに当たり、和辻は次の問いを立てる。「人とは何であるか」<sup>38)</sup>。

この問題に対して、ニーチェは心霊を斥けて身体の尊重を説いている。彼は人の真奥の秘密は人の身体の内にあると言う。「身體に於いては、有機的な變化の最も遠い過去も最も近い過去も、すべて融合渾和して生々たる具體的活動をなしつゝある。また、身體を通じて身體を超え身體より出でて、聞くこともできず見ることもできない神秘的な流れが流れてゐる」<sup>39)</sup>。彼は身体のこのような生々たる活動を権力意志の活動と見ている。身体は種々の性質に現れた権力意志の集合体であると同時に、また一つの権力意志の活動である。「支配しようとする力は多くの力を征服して自己の内に隷屬せしめ、常に新しい創造に努めてゐる。こゝに征服せられた力は、然し、その特質を失つたのではないから、他の多くの力と對立し、またより低き力を支配し、それ自らの活動を續けてゐる。これらの多種多様な力が諧調音の如く相融合し、一つの方向に進んで行く處に、身體がある」<sup>40)</sup>。このように内より湧き出る不斷に創造する力が身体にあるとニーチェは言う。しかし、その「力を除外して

身體を考へるならば、身體は單に殼に過ぎない」<sup>41)</sup>。したがって、ニーチェの言う身體は、ただ直接に自ら生きることによつてのみ觸れられるものなのである。

認識に現れた身體はその象徴に過ぎない。象徴をいくら精微に解剖したところで、何物も掴むことができないのである。したがって、「身體として現はれた權力意志は、知能によつては明らかにされない。この複雑な動的關係を掴み得るものは唯直覺である」<sup>42)</sup>とニーチェは主張している。

要するに、人は「吾人の知識を以て掴むことの出来ない權力意志の活動としてある」<sup>43)</sup>。知識は生そのものに觸れる權能を持つものではない。生に觸れようとしても、そこにはただ抽象單化された図式が出来上がるだけである。それゆゑ、「生をその儘の活動に於いて直接に掴むには、自ら祕密に充ちた深い生の内部に立ち入り、そこで純粹に生きなければならぬ」<sup>44)</sup>。

さらに、和辻は次の問いを立て「生の意義」の所在を考究する。「人が何のために存在し、何のために活動するか」<sup>45)</sup>。

和辻は、ニーチェがその問いに対して、「權力意志」の視点から生の意義獲得のプロセスとその眞の所在について回答するという。和辻の説明に沿って記述してみよう。

まず、ニーチェは人を限定しつつあつた諸種の信念（例えば、意識、觀念、価値など）から離れなければならないと言う。ニーチェはそれらをすべて仮構とし、人としてはたらく權力意志の記号符号とする。それらの記号の奥には常に權力意志の絶え間なき征服と創造とがあるため、人は「～のため」という手段的生き方ではなく、その内奥にある自らの意志の活動の内に生きなければならない。そのことを示すニーチェの次の言葉を和辻は引用する。「何事も人のために爲されるのではなくして、自ら向上し強大とならうとする活動そのものなのである。人類のため社會のための活動ではなくして、自ら成長しようとする活動である」<sup>46)</sup>。このことから、

「生」が、外的な功利性に基づくべきでなく、自己の内奥の権力意志に沿う生き方が支持されることが分かる。

さらに、和辻は、「人が何のために生きるか」<sup>47)</sup>という生の目的について問いを進める。

この問いに対するニーチェの回答を先取りするならば、我々の生の目的は、「進化」であり、それは「超人」となることである。ただ、そうした「進化の内実」を理解するために、我々はニーチェによる「権力意志」や「個と全体の関係性」についてまず把握する必要がある。

ニーチェは、「進化」の内実を、「人の本質が征服と創造との努力」<sup>48)</sup>と表現する。その上で、我々を内奥から突き動かす「権力意志」について、「個と全体」の関係から説明する。

ニーチェはまず「なぜ権力意志は人という個體として活動するのか」について述べている。「権力意志にあっては、個體は全體であり、全體は個體である。即ち、全體としての権力意志が或る特殊の力として活動するのが個體である。特殊と云つても、全體に対しての部分ではない。権力意志は自ら限りなき特殊の力に分れ、また自らその統一に活らく」<sup>49)</sup>。いかに小さな特殊の力であっても、権力意志の全体であり、いかに巨大な渾一の力であっても、権力意志の一つの特質である。このような動的な関係は「征服と創造との努力」としてのみある。そして、「権力意志としての個體は、如何に強大となつても常に對立するものを要する」<sup>50)</sup>とニーチェは主張している。というのは、征服と創造とのためには征服された創造の材料となるものが不可欠だからである。「もし征服と創造との活動が不可能となれば、そこにはもう何も存しない。それゆえ人としての個體は無意味でない。そこに征服と創造とが絶えず行はれればそれで好いのである」<sup>51)</sup>。ニーチェはそれを「進化」と言う。

以上のように、ニーチェによれば、「進化」は絶えず行われる征服と創造とされる。征服は多くの個体を合体し奴隷とし、創造は新しい個体を生産していく。人の

本質は「進化」である。すなわち、人は不断の征服に不断の創造を重ねる努力によって向上し強大していくのである。しかし、その「進化」は、ニーチェによれば人類のためにあるのでもなく、社会のために必要とされるのでもない。「進化」は「権力意志」の活動それ自らであるから、「人の進化」は「人の最も内的な力の、征服、成長、創造等に於ける純粹にして強烈な活動にある」<sup>52)</sup>のである。つまり、人の「進化」は絶えることなく成長する生の充実であるとニーチェは言う。

しかし、知識の凝固的傾向はともすればその流動を阻止しようとする。「権力意志」の薄弱な人にあつては、内より湧き出てはたらいっている生の力が、外より束縛する知識のために完全に阻止されている。ニーチェはこのような凝固する人には「進化」はなく、「人の進化はかゝる凝固に煩はされない場合にのみ可能である」<sup>53)</sup>と言う。生の力、生としてはたらきつつある「権力意志」は、人の内的な力であると共にまた外的な力であり、人の真の自己なのである。ここでは、人にかかわっている内的なものも外的なものも、一切真の自己にかかっているとされる。

要するに、ニーチェの言う「進化」は全く内面的なものであり、知識的凝固を一切洗い去ったところにあるのであって、内的な力を省き去ったところにはあり得ない。「自己は世界の本質であり、また個人の本質である」<sup>54)</sup>と言う如く、永久の生成進行すなわちあらゆる「権力意志」の活動はすべて自己においてはじめて結晶を成すものである。つまり、真の個人は、凝固した思想に煩わされることなく、赤裸々に自己を展開できるものであるとニーチェは強調したのである。

そして、さらに一歩進めて、「人の進化」は、「最も内面的に、真の自由を生き行く人—超人—としてのみあり得る。即ち、まったく獨特な、最も個性的な『生の形式』—超人—としてのみあり得る」<sup>55)</sup>とニーチェは説いている。ニーチェによれば、生を凝固せしめようとするあらゆる束縛を大胆に押し退け得るだけの強烈な生がなければ、そして、一挙にして自由に帰る力強い飛躍がなければ、「超人」は現れ

ないのであるとされる。ニーチェの言う「超人」は人の解放、「権力意志」としての自由な進化を指し示すものといえる。

以上のように、ニーチェは人の本質がはたらきつつある「権力意志」にあることを説き、進化の事実をそこに認め、真の自由を生き行く「超人」に求めている。

### 第三節 「超人」と「自己超克」

本節では、前節で見た「生の目的」に挙げられる進化の先に真の自由を生きる「超人」について、和辻の解釈とは別に、ニーチェの原典を参考しながらさらに吟味していく。

ニーチェの言う「超人」は、彼が「ディオニュソス精神」という場合と同様に一種の隠喩である。ニーチェは『教育家としてのショーペンハウエル』において最初に「超人」を次のように説いている。

「動植物の世界におけるそれぞれの種を考察してみると、個々のより高い模範種をつくること、特別な、強靱な、複雑な、収穫のおおいものをつくること、おおいな目的になっている」<sup>56)</sup>。これを人間社会やその社会の目的に適用するならば、即ち「人類は、個々の偉大な人間をうみだすために、絶えず努めなければならぬ。人間の使命はそのほかにあり得ない」<sup>57)</sup>とされる。その後、ニーチェは、『ツァラトストラはこう言った(上)』において、その「高い模範となる強靱で偉大な人間」を、明確に「超人」という概念で描き出している。彼はこの書物において、「すべての神々は死んだ。いまや、わたしたちは超人の生まれることを願う」<sup>58)</sup>と宣言し、「超人」を「暗雲から発する稲妻」<sup>59)</sup>や、大いなる軽蔑がその中に没することができる「大海」<sup>60)</sup>などに喩えたのである。

このように、『ツァラトストラはこう言った』は、まさに「超人」の賛歌といえる。しかし、ニーチェは「超人」についての明らかな理論的境界線をどこにも引いていない。彼のそれ以後の著作においては、「超人」という比喩は使用されなく

なり、代わって、「高き人」や「強き人」という言葉が「超人」人格を指すようになる。ニーチェの「超人」概念には豊富な内容がある。それは一種の比喻として、ディオニュソス精神と権力意志とを内包して、ニーチェの価値理想を表徴している。

では、なぜ、ニーチェは、「超人」という概念をこの本で象徴的に描出したのだろうか。

それは神を否定するためであった。本書の伏線は、「すべての神々は死んだ」とのセンセーショナルなニーチェの宣言にある。それを受け、彼はあらたな救いの道として「超人の生まれることを願う」のであった。

では、問いを重ねて、ニーチェはなぜ神を否定しようとしたのだろうか。その根本原因としては当時の主要なキリスト教の説教が人間とその理想存在との関係を逆さまにしてしまったからである。神は、キリスト教の教説によると、絶対に我々人間が超越して至ることのできない存在であるとされた。しかもキリスト教では人間は神様によって創造されたものと規定された。すなわち、ニーチェによれば、神は人間自身の超越的表徴であるが、キリスト教の主流派の教説では神は崇高な存在ゆえ人間と隔離されてしまった。このような当時の状況ゆえ、ニーチェは人間自身の進化の先に「超人」を提出し、人間の理想超越を「天上」から「大地」に向けるようにし、人間の理想超越の人間的属性を取り戻そうとしたといえる。

このような人間 - 神の二元世界から一元世界への移行は、『ツァラトゥストラはこう言った』の内でも描かれる。かつて、ツァラトゥストラは世間から逃避して、自分の幻想を人間以外のものに託していこうとしていた。その時、彼は世の中を、神が創造した苦難の世界と見ていたのである。しかし、後ほどになって、彼は気がついてきた。人間が造ったこの形式化された神は、人間の創造であり、人造の狂気である、と。それゆえ、ニーチェにとって、根源的な存在の回復が必要と考えられたのである。そこで、ニーチェは、存在や生の根源力を、観念や天に求めるのではなく、自己の肉体や大地に見、その根源力に忠実であれば、人間の理想超越の人間

的属性を取り戻すことができると考えた。それゆえ、彼は、人間が現実的に自己超克できるように肉体と大地の理想存在を創造すべきであると主張し始めたのである。そして、そうした自己超克した人間を、ニーチェは、「超人」と呼んだのである。このような意味で、彼は自己超克としての超人像を次のように語る。

「超人は大地の意義なのだ」<sup>61)</sup>、「超人こそ大地の意義であれ」<sup>62)</sup>と、あなたがたの意志は声を発して言うべきだとニーチェは言う。「大地の意義」である「超人」は超越を神から人間自身に返し、自分自身を乗り越えて自己超克を完成する。「わたしはあなたがたに超人を教えよう。人間は克服されなければならない或物なのだ。あなたがたは人間を克服するために、何をしたというのか？これまでの存在はすべて、自分自身を乗り越える何物かを創造してきた。あなたがたはこの大きな上げ潮に逆らう引き潮になろうとするのか、人間を克服するよりもむしろ動物に引き返そうとするのか」<sup>63)</sup>。つまり、ニーチェによれば、人間の超越は、実際には自分自身を乗り越えることによって完成するのである。

ニーチェは生命の本質は不断の自己超克であるとする。個体としての人間は体内に巨大な「権力意志」が潜んでいる。この創造的な「権力意志」の力は体内に奔流し、ぶち当たり、ほとばしることを渴望している。この「権力意志」によって、人間は自己を再構築し、自己を乗り越えるのである。無論、この超克は一挙にして出来上がるのではなく、永遠に終わらない活動である。というのは、生は不断の進化、不断の超越であるからである。

「人間における偉大なところ、それはかれが橋であって、自己目的ではないということだ」<sup>64)</sup>。この橋は「深淵のうえにかかる綱」<sup>65)</sup>であり、「渡るのも危険であり、途中にあるのも危険であり、ふりかえるのも危険であり、身震いして足をとめるのも危険である」<sup>66)</sup>。

しかし、人間はそれを渡らなければならない。それがために、人間は強い忍耐力で勇敢に前進し、常に過去を超え、未来に向かって生まれ変わっていくことが必要なのである。

「超人」は上昇する生として、「彼岸」に存在せず、現実の「此岸」における個々の生に存在する。人間が絶え間なく上昇する中で、「超人」という理想が実現する。したがって、生の絶え間ない上昇を達成できるならば、だれもが「超人」になれる。言い換えれば、「超人」は「群衆」の内にある。しかし、それは「動物」の群衆に没入するものではなく、「人間」の群衆において独立の人格を持たなければならないものである。

「超人」は人間であり、また人間でない。というのは、「超人」は人間であるが、人間を超えているからである。「超人」は権力意志で、常に創造をし、常に自己を超えている。ニーチェが「超人」を唱える理由は、人間がとらわれのある自分自身を乗り越えてはじめて自己になれるからである。したがって、ニーチェが言う「超人」の最も本質的な意味は「自己超克」なのである。

ニーチェは「自己超克」を山頂に登ることに喩えて言う。『ツァラトゥストラはこう言った（下）』の「旅びと」という一節において「自己超克」についてのすばらしい叙述がある。

わたしは漂泊の旅びとだ、登山者だ、とかれは自分の心に向って言った。わたしは平地が好きでない。わたしは長いこと腰をおちつけてはいられないらしい。

これから先も、いろんな運命や体験がこの身をおとずれることだろう、—だが、それもきっと漂泊と登攀というかたちになるだろう。われわれは結局、自分自身を体験するだけなのだ。

偶然がわたしを見舞うという時期は、もう過ぎた。いまからわたしが出会うのは、何もかもすでにわたし自身のものであったものばかりだ！

ただ戻ってくるだけだ。ついにわが家に戻ってくるだけだ。—わたし自身の「おのれ」が。ながいこと異郷にあって、いろんな物事と偶然のなかに撒き散らされていたこの「おのれ」が。

それだけではない、—わたしの知っていることは。わたしはいま、わたしの最後の山頂を前にして立っているのだ。これこそ実に長いあいだ、わたしのために取って置かれた山頂だ。ああ、いまこそわたしはわたしの最も険しい道のをぼって行かなければならない。ああ、わたしはわたしの最も孤独な漂泊をはじめることになった！

だが、およそわたしに似た種類の人間は、こうしたひとときを免れることはできない。それはこう語りかけてくるひとときだ。「いまこそ、おまえはおまえの偉大をなしとげる道を行く。山頂と、そして深淵、—それがいまは一つのものとなった！

おまえはおまえの偉大をなしとげる道を行く。これまでおまえを待ちぶせる最後の危険と呼ばれてきたものが、いまはおまえが逃げこむ最後の避難所となった！

おまえはおまえの偉大をなしとげる道を行く。おまえの最後にすでに道が絶えたということがいまはおまえの最高の勇気とならなければならない！

おまえはおまえの偉大をなしとげる道を行く。誰にもこのおまえのあとを追わせてはならない！おまえの足そのものが、いま来た道を踏み消すのだ。「不可能」の文字を掲げるのだ！そして梯子がぜんぜん使えなくなったら、おまえは自分自身の頭を踏んでも攀じ登らなければならない。それだけのことができなかったら、どうして上方へ登ることができるだろう？

自分自身の頭を踏みつけ、自分自身の心臓を踏みにじって！いまこそ、おまえの最も柔和なものまでが、いとも堅固で苛酷なものとならなければならない。67)

ニーチェによれば、この「偉大をなしとげる道」「孤独の道」に乗り出した人、「山頂」に登った人は、上昇を実現した人で、「自己超克」の意味において「自己」になり、「超人」になった人であるとされる。

[付記]本稿は、「甘え」の倫理的意義についてのシリーズ研究の中の一部の前半にあたるものであるが、紙幅の都合によりその後半を今回は割愛する。

## 引用・参考文献

和辻哲郎『ニーチェ研究』筑摩書房、1942年。

ニーチェ著、氷上英広訳『ツァラトオストラはこう言った（上）』岩波書店、1995年。

ニーチェ著、氷上英広訳『ツァラトオストラはこう言った（下）』岩波書店、1995年。

ニーチェ著、大山定一・原佑訳『教育家としてのショーペンハウエル』（初版）創元社、1953年。

## 註

- 1) 和辻哲郎『ニーチェ研究』筑摩書房、1942年。以後、同書からの引用は「同」として頁数のみを記す。『ニーチェ研究』の初版は1913年に株式会社内田老鶴園によって出版されたが、本論文が参考使用したのは1942年に筑摩書房によって出版された第三版である。なお、和辻哲郎の著作『ニーチェ研究』のタイトルや本文からの引用のみ「ニーチェ」という表記を取り、それ以外は一般的な表記「ニーチェ」を用いた。「ニーチェ」という表記のみならず、『ニーチェ

研究』からの一切の引用はその原文表記のままに採用し、またその他の著作からの引用もそのようにすることとした。

- 2) 同 2 頁。
- 3) 同 2 頁。
- 4) 和辻哲郎の『ニーチェ研究』の「自序」の 2 頁参照。
- 5) 同 3 頁。
- 6) 本文中の「真<sup>レ</sup>の哲學」のような傍点は筆者により付けられたものである。
- 7) 同 37 頁。
- 8) 他に、感情的道徳説を説く功利主義の情緒的直覚説やヘルバルトの美的直覚説がある。
- 9) 同 37 頁。
- 10) 同 38 頁。
- 11) 同 38 頁。
- 12) 同 72 頁。
- 13) 同 73 頁。
- 14) 同 73 頁。
- 15) 同 39 頁。
- 16) 同 76 頁。
- 17) 同 40 頁。
- 18) 同 40 頁。
- 19) 同 41 頁。
- 20) 同 41 頁。
- 21) 同 41 頁。
- 22) 同 41 頁。
- 23) 同 41 頁。
- 24) 同 41 頁。
- 25) 同 42 頁。
- 26) 同 45 頁。
- 27) 同 45 頁。
- 28) ニーチェ著、氷上英広訳『ツァラトオストラはこう言った（上）』岩波書店、1995 年。（初版）岩波書店、1967 年。
- 29) 和辻哲郎『ニーチェ研究』筑摩書房、1942 年、45 頁。以後、同書からの引用は「同」として頁数のみを記す。
- 30) 同 45 頁。
- 31) 同 45 頁。
- 32) 同 49 頁。
- 33) 同 49 頁。
- 34) 同 49 頁。
- 35) 同 49 頁。
- 36) 同 49-50 頁。
- 37) 同 3 頁。
- 38) 同 149 頁。

- 39) 同 150 頁。
- 40) 同 151 頁。
- 41) 同 151 頁。
- 42) 同 152 頁。
- 43) 同 158 頁。
- 44) 同 158 頁。
- 45) 同 158 頁。
- 46) 同 159 頁。
- 47) 同 160 頁。
- 48) 同 160 頁。
- 49) 同 160 頁。
- 50) 同 161 頁。
- 51) 同 161 頁。
- 52) 同 162 頁。
- 53) 同 163 頁。
- 54) 同 165 頁。
- 55) 同 166 頁。
- 56) ニーチェ著、大山定一・原佑訳『教育家としてのショーペンハウエル』（初版）創元社、1953 年、67 頁。以後、同書からの引用は「同」として頁数のみを記す。
- 57) 同 66 頁。
- 58) ニーチェ著、氷上英広訳『ツァラトオストラはこう言った（上）』岩波書店、1995 年、133 頁。以後、同書からの引用は「同」として頁数のみを記す。（初版）岩波書店、1967 年。
- 59) 同 28 頁。
- 60) 同 16 頁。
- 61) 同 15 頁。
- 62) 同 15 頁。
- 63) 同 14 頁。
- 64) 同 19 頁。
- 65) 同 18 頁。
- 66) 同 19 頁。
- 67) ニーチェ著、氷上英広訳『ツァラトオストラはこう言った（下）』岩波書店、1995 年、10-11 頁。（初版）岩波書店、1967 年。

## Ethical Significance of *Amae*

### — Proposal from Watsuji's Philosophy of Life (2) —

Ping Huang

This paper deals with *Nietzsche Kenkyu*, which developed a philosophy of life (*die Philosophie des Lebens*) that connects individuals to the essence of life (*Leben*). The significance of the philosophy of life is shown in the present when our fundamental way of life is shaken by the rapid progress of science, technology, and computerization. In this dissertation, concepts such as intuition, will to power (*wille zur macht*), superman (*übermensch*), and self (*selbst*), which are related to the inner facts of life in Watsuji–Nietzsche's theory, are elucidated by quoting *Nietzsche Kenkyu*, and the connection of these concepts with the inner nature of life is clarified. Nietzsche's philosophy is the most direct ideological expression of internal experience as a pure life of self-expression and the creative activity of will to power. The will to life is the power that is working and becomes life itself.

(Supplementary note) This article is the first half of a series of studies on the ethical significance of *Amae*. The second half was omitted owing to space limitations.